＜訳註研究＞

Bhāravi 作 Kirātārjunīya 第２章
――テクストならびに訳註――

古 宇 田　亮　修

はじめに

本稿は，古典サンスクリット（Classical Sanskrit）の精華とされるマハー・カーヴィヤ（Mahākāvya-）の代表的な作品の一つであるバーラビ（Bhāravi-, Bh.）作『山の民（キラータ）とアルジュナの戦い（Kirātārjunīya, Kir.）』第２章のローマナイズと訳註であり，過日筆者が『松濤誠達先生古稀記念梵文学研究論集』（大祥書籍，2007）に寄稿した第１章に続くものである。なお参考文献ならびに略号は第１章に準じ，追加分のみ以下に記した。

〈参考文献〉（追加分のみ）

Ekāvalī　Edited by P. Sriramacandrudu, Haidarabad, 1981.

Kauṭilya-Arthaśāstra　Edited by R. P. Kangle, Delhi, 1986, 3vols.　カウティリヤ著，上村勝彦訳『実利論：古代インドの帝王学』（上・下）（岩波文庫），1984.

Kāmandakīya-Nītisāra　Ed. Ānandāśrama Sanskrit Series No. 136, Poona, 1958, 1964.　カーマンダキ著，上村勝彦訳『ニーティサーラ：古典インドの政略論』（平凡社，東洋文庫），1992.

Kir.の解釈をめぐって

Bh. の文体は，少なくとも１～２章においては，特に晦渋であるとは言えないが，それでも解釈において種々の難点があり，註釈家 Mallinātha や，現代の翻訳者である C. Cappeller, M. R. Kale, J. A. F.

Roodbergen らによって，その比喩が充分に理解されていないと思われる箇所が存在する。ここではその一例として 2. 39 を取り挙げてみよう。

kva cirāya parigrahaḥ śriyāṃ
　　kva ca duṣṭendriyavājivaśyatā /
śaradabhracalāś calendriyair
　　asurakṣā hi bahucchalāḥ śriyaḥ // 39 //

まず，この詩の現代語訳を参考までに以下に挙げる。

Cappeller : Wie lässt sich der Besitz des Glücks auf die Dauer mit der Unterwürfigkeit unter die bösen Sinnesrosse vereinigen?　Das trügerische, wie eine Herbstwolke flüchtige Glück ist von den Leichtsinnigen schwer festzuhalten.

Kale : Where is retaining into possession riches (royalty) for a long time and where subjection to (yielding to the influence of) the horse-like sense ! (how difficult to reconcile the two !) fortunes flitting like the autumnal clouds and full of pretexts (to pass away) cannot be well retained by those whose senses are unsteadly (i. e. who have no control over their senses).

Roodbergen : How can keeping the royal fortune for a long time and being under the control of unruly, horse-like senses go together? Because those who do not control their senses cannot guard their good fortune which drifts away like autumn clouds (and) which finds many pretexts (for doing so).

この原文における主題は「繁栄の保持 (parigrahaḥ śriyāṃ)」であり，それがまず「馬のような凶暴な感官に屈従すること」と対比され，その両者がいかに離れているかが a-b に述べられている。そしてその理

由が c-d に述べられている。この詩において，主題である śrī-という語が単に幸運・繁栄を意味するだけであるなら解釈は簡単である。そのような解釈で，次のように訳すことも可能であろう。

「長い間繁栄を掌握することと，馬のように暴れる感官に屈従することとは，いかにかけ離れていることであろうか。なぜなら，秋の雲のように不安定であり，多くの落し穴をもつ繁栄は，感官が不安定な人々によっては護りがたいからである。」

しかしながら，この訳では，Bh.がこの詩に込めた意味を充分に表しているとは言えない。śrī-という語は，確かに Kale, Roodbergen が訳しているように good fortune（あるいは prosperity）の意味であろうが，（男性の）感官に対応するものとしては，「（美しい）女性」がその背後に想定されていると考えるのが自然であろう[1]。

すなわち，c-d では「秋の雲のように不安定な（śaradabhracala-）」という語によって「繁栄の崩れやすさ」を述べるとともに，移ろいやすい「女心」が表現されていると考えられ，次の bahucchala-という語によって，まず繁栄には「落し穴がたくさんある」ことを述べるとともに，女性に関しては「言い訳をたくさん用意している」様を述べていると考えられる。Kir.の解釈に関し，しばしば権威として尊重されてきた Mallinātha 註においては，chala-の意味について有益な説明がなされているが，この Śleṣa（掛詞）に関する詳しい説明はなされて

[1] 言うまでもなく Kir.の主題は勇者の生き方である．[Peterson 2003 : 37-38]によれば，諸々の註釈家により，Kir.の最も主要なラサは，勇者のラサ（vīrarasa-）であると解され，４種の勇者のうち，戦闘的勇者（yuddhavīra-）が描かれているとされる（残り３種は富裕的勇者（dānavīra-），宗教的勇者（dharmavīra-），慈悲的勇者（dayāvira-）である）．

いない。ただ，繁栄を意味する女性名詞が比喩上の女性を暗示する用例は，2. 30 にも見られており[2]，抽象名詞が擬人的に用いられることも少なくない[3]。

以上のような解釈により，筆者は以下のように翻訳した。

「長い間繁栄を保持することと，馬のように暴れる感官に屈従することとは，いかにかけ離れていることであろうか。なぜなら，秋の雲のように移ろいやすく，多くの落し穴（いいわけ）を用意した繁栄〔という女性〕は，感官が不安定な人々によっては護りがたいからである。」

Kir.の文体について

Kir.の文体については，Kāvya 作家の特長を述べた以下の詩（詠人知らず）が伝えられている[4]。

upamā kālidāsasya bhāraver arthagauravam /
naiṣadhe padalālityam māghe santi trayo guṇāḥ //
「カーリダーサの直喩，バーラヴィの意味の重さ，ナイシャダ〔チャリタ〕の言葉遊びは〔比類なく〕，マーガには３つの美点〔兼備せり〕。」

また，註釈家 Mallinātha は，その註釈の序偈において，Śleṣa を用いて以下のように Bh.を讃えている。

---

[2] ただし，そこでは saṃpad-という語が用いられている．むろん厳密には，śrī-や saṃpad-に「女性」という意味はないのだから，その両語自体は掛詞というより，第二の意味を暗示している語にすぎない．
[3] 2. 10 を参照．
[4] [Har 1983 : 51].

nārikelaphalasaṃmitaṃ vaco bhāraveḥ sapadi tad vibhajyate /
svādayantu rasagarbhanirbharaṃ sāram asya rasikā yathepsitam //
ヤシの実に等しいバーラヴィの言葉がまもなく展開されます。
美味を知る人は果汁を内部に湛えたこの果肉を思う存分味わい下さい（／目利きの鑑賞家はラサを内部に湛えたこの精髄を思う存分お楽しみ下さい。）

すなわち，Kir.は，美味（ラサ）を知る人（目利きの鑑賞家）のみがその内部の精髄（ラサ）を味わうことができるのであり，換言すれば，美味を知らない人は殻である表層の意味だけで満足してしまうと言えよう[5]。artha-gaurava-とは，まさしくそのような意味の重層性を指すのである。その意味で，Kir. 自体，ある種の謎掛けであり，Bh.が幾多のサンスクリット詩人のうちで不動の名声を獲得した理由の一つがここにも窺われるのである。

[5] 2. 38 も Śleṣa であるが，第 2 の意味（そこでは「太陽」に関する掛詞）の多くは翻訳に反映させなかった．Kir.にかぎらず，詩的言語は「すべてを説明せずにすべてを語る」という経済性が利点であるから，訳文においてもそれを再現することが翻訳の理想であろう．

テクストならびに訳註

vihitāṃ priyayā manaḥpriyām

atha niścitya giraṃ garīyasīm /

upapattimad ūrjitāśrayaṃ nṛpam

ūce vacanaṃ vṛkodaraḥ // 1 // Meter : Sundarī[6] (1-56)

その時，ヴリコーダラ（＝ビーマ）は，妻によって述べられた心地好い言葉が価値あるものであると確信して，王に対して，道理に適い，高邁な精神に基づく言葉を述べた。

yad avocata vīkṣya[1] māninī 1. avocad avekṣya Pā.

paritaḥ snehamayena cakṣuṣā /

api vāgadhipasya durvacaṃ

vacanaṃ tad vidadhīta vismayam // 2 //

「誇りあるかの女によって，愛情に満ちた目で，すべての面から検討して述べられた，言葉の王（ブリハスパティ）にとっても述べがたいその言葉は，驚きを引き起こすにちがいありません。

viṣamo ’pi vigāhyate nayaḥ

kṛtatīrthaḥ payasām ivāśayaḥ /

sa tu tatra viśeṣadurlabhaḥ

sad upanyasyati kṛtyavartma yaḥ // 3 //

危険のある湖でも，沐浴場が作られた時には入られるように，政策は理解し難いものであっても，施策が実行された時には理解されますが，しかしながら，そこにおいて義務の道を正しく説く人はきわめて獲得し難いのです。

---

[6] Viyoginī, Vaitālīya とも呼ばれる．
ac : |⏑ ⏑ – |⏑ ⏑ – |⏑ – ⏑ |– |. bd : |⏑ ⏑ – |– ⏑ ⏑ |– ⏑ – |⏑ – |.

pariṇāmasukhe garīyasi

vyathake ’smin vacasi kṣataujasām /

ativīryavatīva bheṣaje bahur

alpīyasi dṛśyate guṇaḥ // 4 //

消化に役立つ，極度の効力をもつ薬のような，生命力が衰弱した人々を恐れさせる，この最上の言葉には，ほんの少しでも多大な効果があるのです。

iyam iṣṭaguṇāya rocatāṃ

rucirārthā bhavate ’pi bhāratī /

nanu vaktṛviśeṣaniḥspṛhā

guṇagṛhyā vacane vipaścitaḥ // 5 //

輝かしい意味を有するこの言葉は，美徳を愛でるあなたにとっても喜ばしいはずです。美徳を理解する賢い人々は，言葉に対して特定の話者を欲しないはずではないでしょうか[7]。

catasṛṣv api te vivekinī

nṛpa vidyāsu nirūḍhim āgatā /

katham etya matir viparyayaṃ

kariṇī paṅkam ivāvasīdati // 6 //

王よ，４つもの学問[8]に精通し，判断力あるあなたの知力は，どうして誤謬に陥り，沈んでしまったのでしょうか――雌象が泥沼に入って沈むように。

---

[7] [Har 1983] によれば，Arthāntaranyāsa が用いられている．

[8] M.註：「哲学（ānvīkṣikī-），ヴェーダ学（trayī-），経済学（vārtā-），政治学（daṇḍanīti-）は永遠であり，また，これら４種の学問は，世間の安寧をもたらす原因である，と Kāmandakīya-Nītisāra（2. 2）に述べられている．」

vidhuraṃ kim ataḥ paraṃ parair

avagītāṃ gamite daśām imām /

avasīdati yat surair api

tvayi saṃbhāvitavṛtti pauruṣam // 7 //

あなたが敵たちによって罵倒されるというこの状況に達し，神々によってさえ行動を尊敬された勇力が滅びるということ以上に，いかなる災難があるというのでしょうか。

dviṣatām udayaḥ sumedhasā

gurur asvantataraḥ sumarṣaṇaḥ /

na mahān api bhūtim icchatā

phalasaṃpatpravaṇaḥ parikṣayaḥ // 8 //

明晰な知性をもつ人にとって，敵たちの繁栄が大きいものであろうとも，良い帰趨をもたないものは耐えやすいのです。〔しかしながら〕繁栄を望んでいる人にとって，〔敵たちの，見かけ上の〕衰退が大きくとも，結果の実現に向かっているものは耐え難いのです。

acireṇa parasya bhūyasīṃ

viparītāṃ vigaṇayya cātmanaḥ /

kṣayayuktim upekṣate kṛtī

kurute tatpratikāram anyathā // 9 //

有能な人は，近いうちに敵が没落する〔可能性〕が大きいことを計算したうえで，自身の衰亡の可能性を等閑に付すのです。さもなければ，かれはそれに対する対抗措置を実行するのです。

anupālayatām udeṣyatīṃ

prabhuśaktiṃ dviṣatām anīhayā /

apayānty acirān mahībhujāṃ

jananirvādabhayād iva śriyaḥ // 10 //

台頭しつつある敵たちの支配力を，怠惰によって無視している諸侯

たちの繁栄は，遠からず消滅することでしょう――あたかも〔繁栄が〕人民の非難を恐れるかのようにして[9]。

kṣayayuktam api svabhāvajaṃ
dadhataṃ dhāma śivaṃ samṛddhaye[1] /
praṇamanty anapāyam utthitaṃ[2]
pratipaccandram iva prajā nṛpam // 11 //

1. vivṛddhaye Pā.
2. ucchritaṃ Pā.

没落していたとしても，天性の吉祥なる威光を与えつつ，繁栄のために努力している，不滅の王に対しては，人民は敬礼するのです――縁起の良い三日月に対して人々が礼拝するように。

prabhavaḥ khalu kośadaṇḍayoḥ
kṛtapañcāṅgavinirṇayo nayaḥ /
sa vidheyapadeṣu dakṣatāṃ
niyatiṃ loka ivānurudhyate // 12 //

５部門[10]の完全な決定をなした政策は，実に国庫と軍隊の起源であり，なすべき事項に対する実行力に従うのです――世間の人々が運命に従うように。

abhimānavato manasvinaḥ
priyam uccaiḥpadam ārurukṣataḥ /
vinipātanivartanakṣamaṃ
matam[1] ālambanam ātmapauruṣam // 13 //

1. tamam Pā.

自尊心を持ち，好ましい地位に昇進しようと望んでいる決意の堅い人にとって，かれ自身の勇力こそが，災難を阻止することのできる拠

---

[9] M.註：「……とは原因に関する Utprekṣā である．」

[10] M.註は，５部門の定義として Kauṭilya-Arthaśāstra 1. 15. 42「事業を始める方法，人と物資を備えておくこと，場所と時間の割り当て，災難対策，目標の達成，これらが〔政策協議における〕５部門である」と，Kāmandakīya-Nītisāra 12. 36「支援，遂行手段，場所と時間の割り当て，災難対策，成就，〔これらが〕５部門であると規定されている」を挙げている．

り所として尊重されるのです。

vipado ’bhibhavanty avikramaṃ

rahayaty āpadupetam āyatiḥ /

niyatā laghutā nirāyater

agarīyān na padaṃ nṛpaśriyaḥ // 14 //

災難は武勇を欠く人を打ち負かし，未来は災難に見舞われた人を見捨てます。未来（さき）のない人が軽視されることは確実です。王の繁栄にとって地位は軽く見なされるべきものではありません[11]。

tad alaṃ pratipakṣam unnater

avalambya vyavasāyavandhyatām /

nivasanti parākramāśrayā

na viṣādena samaṃ samṛddhayaḥ // 15 //

それゆえに，繁栄の障害である「努力は無益だ」という考えに依拠してはならないのです。武勇を拠り所とする繁栄は，無気力とは共存しないのですから[12]。

atha ced avadhiḥ pratīkṣyate

katham āviṣkṛtajihmavṛttinā[1] /　　1. ˚mūrtinā Pā.

dhṛtarāṣṭrasutena sutyajāś

ciram āsvādya narendrasaṃpadaḥ // 16 //

もしも〔統治の〕期限が待たれたとしても，悪徳な振舞いを顕示しているドリタラーシュトラの息子（＝スヨーダナ）は，長い間，支配

---

[11] M.註：「avikrama-等の先行するものが，それぞれ「災難」等の後続するものに対する原因であることから，Kāraṇamālā（原因の花環）という名の修辞法が用いられている．同様に〔述べる〕スートラがある――『それぞれ先行するものが後続するものの原因である時，Kāraṇamālā〔と呼ばれる〕．』（Alaṃkārasarvasva sū. 54）と．」

[12] M.註：「性質の相違によって，結果と原因からなる Arthāntaranyāsa が〔用いられている〕．」

者としての豊かさを味わった後で，どうして〔それを〕たやすく手放せるでしょうか。

dviṣatā vihitaṃ tvayāthavā

yadi labdhā punar ātmanaḥ padam /

jananātha tavānujanmanāṃ

kṛtam āviṣkṛtapauruṣair bhujaiḥ // 17 //

あるいは，もしも自らの地位が敵によって規定され，〔それが〕あなたによって獲得されたとしても，王様よ，あなたの弟たちの勇力を顕示する手腕によって何がなされたというのでしょうか。

madasiktamukhair mṛgādhipaḥ

karibhir vartayate[1] svayaṃ hataiḥ /

laghayan khalu tejasā jagan[2]

na mahān icchati bhūtim anyataḥ // 18 //

1. vartayati D.

2. laghum Pā.

野獣の王（ライオン）は，自ら殺した，マダ液で顔を濡らした象たち[13]によって生きているのです。実に威光によって生きとし生けるものたちを凌駕している偉大なものは，他人からの富を望むことはありません[14]。

abhimānadhanasya gatvarair

asubhiḥ sthāsnu yaśaś cicīṣataḥ /

acirāṃśuvilāsacañcalā

nanu lakṣmīḥ phalam ānuṣaṅgikam // 19 //

はかない生命と引き換えに，永遠の名声を獲得しようと欲している，自尊心のみを財産とする人にとって，繁栄とは稲妻の閃光のように消

---

[13] マダ液とは，発情期の象の額から出る液体のことであり，この表現により発情期の凶暴な象たちをも殺すライオンの強さが表現されている．

[14] M.註：「特殊的事項によって，述べようとしている普遍的事項を立証することからなる Arthāntaranyāsa が〔用いられている〕．」

えやすいものであり，実に付随する結果に過ぎないのです[15]。

jvalitaṃ na hiraṇyaretasaṃ

cayam āskandati bhasmanāṃ janaḥ /

abhibhūtibhayād asūn ataḥ sukham

ujjhanti na dhāma māninaḥ // 20 //

人々は，燃え上がっている黄金の種子（＝火）を踏みつぶすことはありませんが，灰の集まりは踏みつぶします。誇りをもつ人々は，この軽蔑に対する恐れから，たやすく命を捨てますが，栄光を捨てることはありません[16]。

kim apekṣya[1] phalaṃ payodharān　　1. avekṣya Pā.

dhvanataḥ prārthayate mṛgādhipaḥ /

prakṛtiḥ khalu sā mahīyasaḥ

sahate nānyasamunnatiṃ yayā // 21 //

野獣の王は，いかなる結果を期待して雷鳴を轟かしている雲を攻撃するというのでしょうか。〔それには〕実にたいへん強力な人の本性が，他人の台頭を許さないという理由しかございません[17]。

kuru tan matim eva vikrame

nṛpa nirdhūya tamaḥ pramādajam /

dhruvam etad[1] avehi vidviṣāṃ　　1. evam Pā.

tvadanutsāhahatā vipattayaḥ // 22 //

それゆえに，王様よ，誤謬より生じた妄想を振り払って，武勇に対

---

[15] M.註：「ここでは，はかない生命を捨てることにより，永遠の名声が約束されることを述べているので，劣ったものをすぐれたものに交換するというParivṛtti（交換）という修辞法が〔用いられている〕．それは，Kāvyaprakāśaに述べられている―『Parivṛtti とは，同じものでも異なるものでも事柄の交換である』(sū. 113)と．」

[16] M.によれば，Arthāntaranyāsa が用いられている．

[17] M.によれば，Arthāntaranyāsa が用いられている．

する決意をお作り下さい。敵たちの破壊があなたの意気消沈によって妨げられたことは確実であることをご理解下さい。

dviradān iva digvibhāvitāṃś

caturas toyanidhīn ivāyataḥ /

prasaheta raṇe tavānujān

dviṣatāṃ kaḥ śatamanyutejasaḥ // 23 //

４頭の方位象や４つの海のように，あらゆる地方に名を知られ，百の怒りをもつもの（＝インドラ）の武勇を有する，あなたの４人の弟たちが戦場に現れたとき, 敵たちの内の一体誰が抵抗することができるというのでしょうか。

jvalatas tava jātavedasaḥ

satataṃ vairikṛtasya cetasi /

vidadhātu śamaṃ śivetarā

ripunārīnayanāmbusantatiḥ // 24 //

敵の妻の不幸なる涙の流れが，敵によって作られ，あなたの心の中で絶えず燃え上がっている〔怒りの〕火の鎮めを行うべきなのです[18]。」

---

[18] M.註：「怒りという表示対象を飲み込むことによって火という表示項目が述べられていることから，Atiśayokti（誇張描写）という修辞法が〔用いられている〕…（中略）…同様に水をまくことによって火が消えるように，敵の殺害によって怒りが〔消える〕という比喩表現が理解される.」

すなわち，「敵の妻の不幸なる涙の流れ」という表現によって「敵の殺害」が表され,「敵によって作られ, あなたの心の中で絶えず燃え上がっている火」という表現によって「怒り」が表されている.「怒り」そのものは「火」ほどの高熱やエネルギーをもたないのにもかかわらず,「火」と表現されているので, M.は「怒り」のエネルギーを誇張した描写であると述べているのである. また，私見では「涙が流れ落ちることで火を消す」ということも現実にはあり得そうもないので，これも Atiśayokti であろう．すなわち，この比喩により敵の死による妻の悲しみの大きさが表現されると同時に，それによって怒

iti darśitavikriyaṃ sutaṃ

marutaḥ kopaparītamānasam /

upasāntvayituṃ mahīpatir

dviradaṃ duṣṭam ivopacakrame // 25 //

このように興奮をあらわにし，怒りに満ちた心をもつマルト神の息子（＝ビーマ）に対し，大地の主（＝ユディシュティラ）は，なだめることに着手した――暴れ象に対するようにして。

apavarjitaviplave śucau

hṛdayagrāhiṇi maṅgalāspade /

vimalā tava vistare girāṃ

matir ādarśa ivābhidṛśyate // 26 //

「心を魅了し，幸運の住まいである，ほこりを拭き取った綺麗な鏡のような，汝の言葉の拡がりにおいて，清らかな知性が見られる。

sphuṭatā na padair apākṛtā

na ca na svīkṛtam arthagauravam /

racitā pṛthagarthatā girāṃ

na ca sāmarthyam apohitaṃ kvacit // 27 //

〔意味の〕明白さが語によって除去されることはなく，また，意味の重々しさが欠けていることはない。言葉は，個別の意味を持つように形造られており，また，意味表示力は，いかなる場所においても排除されることはない。

upapattir udāhṛtā balād

anumānena na cāgamaḥ kṣataḥ /

idam īdṛg anīdṛgāśayaḥ

prasabhaṃ vaktum upakrameta kaḥ // 28 //

りが消え，心の平安がもたらされるのだから，罪悪感を感じる必要はない，という背後の意味を表していると考えられる．

〔武士(クシャトリヤ)の〕論理は力に依拠して述べられ，また，聖典は推論によって損なわれることはない。このような〔武士としての〕志をもたない，いかなる男がこのようなことを烈しく述べ始めるであろうか。

avitṛptatayā tathāpi me
hṛdayaṃ nirṇayam eva dhāvati /
avasāyayituṃ[1] kṣamāḥ sukhaṃ
na vidheyeṣu viśeṣasaṃpadaḥ // 29 //

1. vyavasāyayituṃ Pā.

それでもなお，わが心は納得しないので，まさに決心を目指して進んでいる最中である。政策決定(なすべきこと)における種類の豊富さにより，たやすく決定することができないのある[19]。

sahasā vidadhīta na kriyām
avivekaḥ param āpadāṃ padam /
vṛṇate[1] hi vimṛśyakāriṇaṃ
guṇalubdhāḥ svayam eva saṃpadaḥ // 30 //

1. vṛṇute Pā.

あわてて仕事を実行してはならない。熟慮に欠けることは絶対に災難の住み処である。なぜなら，美徳を欲する繁栄は，熟慮して行う人をまさに自ら婿に選ぶからである[20]。

---

[19] M.註：「後半の文の意味が，決心を促進することに対する原因であることが述べられていることから，文の意味が原因を表すという Kāvyaliṅga（詩的理由）という修辞法が用いられている．それは述べられている――『原因が文または語句の原因である場合は，Kāvyaliṅga と呼ばれる』と．」

[20] M.註：「ここでは，慌てて実行することを禁じることによって得られた，熟慮して実行することからなる原因が災難からなる対照的な結果によって正当化されているのであるから，性質の相違による Arthāntaranyāsa が用いられている．そして後ろ半分によって，性質の類似による〔Arthāntaranyāsa が用いられている〕と知るべきである．」

abhivarṣati yo ’nupālayan

vidhibījāni vivekavāriṇā /

sa sadā phalaśālinīṃ kriyāṃ

śaradaṃ loka ivādhitiṣṭhati // 31 //

思慮という水によって施策という種を湿らせ，保護している人は，常に成果をもたらす仕事に安立する――世間の人々が実りをもたらす秋に安立するように[21]。

śuci bhūṣayati śrutaṃ vapuḥ

praśamas tasya bhavaty alaṃkriyā /

praśamābharaṇaṃ parākramaḥ

sa nayāpāditasiddhibhūṣaṇaḥ // 32 //

清浄なる聖典学習は，身体を飾るものである。それによる心の平安は飾りであり，心の平安の飾りは武勇である。〔さらに〕それは，政策とそれによってもたらされた成功という飾りをもつ[22]。

matibhedatamastirohite

gahane kṛtyavidhau vivekinām /

sukṛtaḥ pariśuddha āgamaḥ

kurute dīpa ivārthadarśanam // 33 //

意見の相違という暗黒によって覆われ，込み入った義務の実践において，判断力のある人々によってよく学習された清浄なる聖典は，目標を明らかにする――灯火が物を照らし出すように。

---

[21] M.註：「ここでは，収穫物と結果を意味する phala-という語によって，〔両者の〕違いをなくそうと試みていることから，Śleṣa を基礎とする Atiśayokti と，それと適合した Upamā が〔用いられている〕と考えるべきである．」

[22] M.註：「ここでは，それぞれ後ろの語が前の語に対する修飾語であることから，Ekāvalī（ネックレス）という修辞法が用いられている．それは述べられている――『それぞれ，前の語に対して後ろの語が順序正しく修飾語として機能している時，この修辞法は Ekāvalī と呼ばれる』（Ekāvalī 8. 46）と．」

spṛhaṇīyaguṇair mahātmabhiś

carite vartmani yacchatāṃ manaḥ /

vidhihetur ahetur āgasāṃ[1] 1. adūṣitāyatiṃ Pā.

vinipāto 'pi samaḥ samunnateḥ // 34 //

人もうらやむほどの美徳を有する偉大な人々によって歩まれてきた道に心を向けている人々にとっては，運命に起因し，過失を原因としない災難であろうとも出世に等しいのである[23]。

śivam aupayikaṃ garīyasīṃ

phalaniṣpattim adūṣitāyatīm[1] / 1. adūṣitāyatim Pā.

vigaṇayya nayanti pauruṣaṃ

vijitakrodharayā jigīṣavaḥ // 35 //

怒りの衝動に打ち勝ち，征服を欲している人々は，未来が有望なる結果の実現を考えて，勇力を縁起の良い偉大な方策にまで導くのである[24]。

apaneyam udetum icchatā

timiraṃ roṣamayaṃ dhiyā puraḥ /

avibhidya niśākṛtaṃ tamaḥ

prabhayā nāṃśumatāpy udīyate // 36 //

上昇を欲する者は，初めに怒りに由来する無知を叡知によって除去

---

[23] M.註：「人の運命に関することは非難してはならない，という背後の意味がある．カーマンダカが述べているのと同様に――『正しく企画された仕事が失敗に終わるからといって，企画者を非難してはならない――勇力が運命に飲み込まれた〔にすぎないのだから〕.』（Kāmandakīya-Nītisāra 12. 19）と．」

[24] M.註：「勇力を方策と結びつける，という意味である．結果が確信されていない行為を行なわない，という背後の意味がある．カーマンダカが述べているのと同様に――『成果のない行為，苦しみが多い行為，成果が不確定な行為，恨みを買う行為を，思慮ある者はどんな時でもなしてはならない.』（Kāmandakīya-Nītisāra 12. 22）と．」

すべきである――太陽でさえも，夜に作られた暗黒を打ち破らずに昇ることはないのであるから。

balavān api kopajanmanas

tamaso nābhibhavaṃ ruṇaddhi yaḥ /

kṣayapakṣa ivaindavīḥ kalāḥ

sakalā hanti sa śaktisaṃpadaḥ // 37 //

力ある者でも，怒りから生じる迷妄の攻撃を阻止しないならば，かれはあらゆる権力の装備を滅ぼすのである――黒月が細い月を滅ぼすように。

samavṛttir upaiti mārdavaṃ

samaye yaś ca tanoti tigmatām /

adhitiṣṭhati lokam ojasā

sa vivasvān iva medinīpatiḥ // 38 //

公正な振舞いを有し，時に応じて優しくなったり，厳しさを増したりする大地の主（＝大王）は，権威によって世界を統治するのである――太陽が輝きによって世界を統治するように。

kva cirāya parigrahaḥ śriyāṃ

kva ca duṣṭendriyavājivaśyatā /

śaradabhracalāś calendriyair

asurakṣā hi bahucchalāḥ śriyaḥ // 39 //

長い間繁栄を保持することと，馬のように暴れる感官に屈従することとは，いかにかけ離れていることであろうか。なぜなら，秋の雲のように移ろいやすく，多くの落し穴（いいわけ）を用意した繁栄〔という女性〕は，感官が不安定な人々によっては護りがたいからである[25]。

---

[25] M.註：「文の意味が理由を表す Kāvyaliṅga という修辞法が用いられている.」

kim asāmayikaṃ vitanvatā

manasaḥ kṣobham upāttaraṃhasaḥ /

kriyate patir uccakair apāṃ

bhavatā dhīratayādharīkṛtaḥ // 40 //

〔かつては〕堅固さによって海をも凌いだお前が，どうして慌てた心の適時ならぬ動揺を露わにし，〔再び海を〕上位に置くのであろうか[26]。

śrutam apy adhigamya ye ripūn

vinayante [1] na śarīrajanmanaḥ /　　1. D. *adds* sma.

janayanty acirāya saṃpadām

ayaśas te khalu cāpalāśrayam // 41 //

聖典を学習しても，身体から生じる敵を鎮圧していない人々は，必ずや，すぐに繁栄の不安定さを拠り所とする悪評を生み出すのである。

atipātitakālasādhanā

svaśarīrendriyavargatāpanī[1] /　　1. tāpinī Pā.

janavan na bhavantam akṣamā

nayasiddher apanetum arhati // 42 //

逸脱した時間と方法による，自己の身体と感官群を苦しめる怒りは，〔一般の〕人々のように[27]，あなたを政策の成功から引き離すには及ばない[28]。

---

[26] M.註：「〔一度〕打ち破った者を再び上位に置いてはならない，という背後の意味がある．ここでは，vitanvatā がビーマに対する修飾語であることによって，「海」という語句の意味が，超越の手段に対する原因であることを述べているので，Kāvyaliṅga という修辞法が〔用いられている〕．」

[27] M.註：「janavat＝凡人のように (pṛthagjanam iva) .」

[28] [Har 1983] によれば，Arthāntaranyāsa が用いられている．

upakārakam āyater bhṛśaṃ

prasavaḥ karmaphalasya bhūriṇaḥ /

anapāyi nibarhaṇaṃ dviṣāṃ

na titikṣāsamam asti sādhanam // 43 //

大いに未来に貢献し，行動の多大な成果の源であり，不滅であり，敵たちを滅亡させるという忍耐に等しい方法は，〔他には〕存在しない[29]。

praṇatipravaṇān vihāya naḥ

sahajasneha[1]-nibaddhacetasaḥ /　　1. ˚prema˚ Pā.

praṇamanti sadā suyodhanaṃ

prathame mānabhṛtāṃ na vṛṣṇayaḥ // 44 //

生来の愛情によって心を結びつけた，誇りを持つ人々の中で第一のヴリシュニの子孫たちは，敬礼に専念した我々を見捨て，常にスヨーダナに敬礼するわけではないのである[30]。

suhṛdaḥ sahajās tathetare

matam eṣāṃ na vilaṅghayanti ye /

vinayād iva yāpayanti te

dhṛtarāṣṭrātmajam ātmasiddhaye // 45 //

かれら（＝ヴリシュニの子孫たち）の考えに背くことのない，元からの，あるいは外様（とざま）の味方たちは，自らの成功のために，ドリタラーシュトラの息子（＝スヨーダナ）に対して，あたかも忠順であるかのよう

---

[29] M.註：「titikṣāsamam という複合語においては，直喩の対象が述べられていない，意味にまつわる〔直喩〕であり，不完全な直喩である．bhṛśa-, āyati-, anapāyin-という語によって，他の方法との相違性にもとづく Vyatireka（対比）が表されている．違いに重点がある場合，〔すなわち〕直喩より直喩の対象が優れている場合と，その逆の場合に，Vyatireka と〔言われる〕.」

[30] M.註：「多くの語句の意味が原因を表すという Kāvyaliṅga という修辞法が〔用いられている〕.」

に〔仕えて〕生活している〔にすぎないのである〕。

abhiyoga imān mahībhujo

bhavatā tasya tataḥ kṛtāvadheḥ[1] / 1. kṣatāvadheḥ Pā.

pravighāṭayitā samutpatan

haridaśvaḥ kamalākarān iva // 46 //

〔統治の〕期限を定めたかれ（＝スヨーダナ）に対して，あなたによって〔期限内に〕実行された攻撃は，これらの諸侯を分裂させるに違いない――昇りつつある黄色い馬（＝太陽）が，蓮のつぼみを開かせるように[31]。

upajāpasahān vilaṅghayan

sa vidhātā nṛpatīn madoddhataḥ /

sahate na jano ’py adhaḥkriyāṃ

kim u lokādhikadhāma rājakam // 47 //

激情に狂ったかれ（＝スヨーダナ）は，謀反を起こすことのできる諸侯を辱めながら命令する人である。〔普通の〕人でさえも恥辱を我慢することはない。ましてや，並外れた権威（プライド）をもつ諸侯の集団なら，なおさらである。

asamāpitakṛtyasaṃpadāṃ

hatavegaṃ vinayena tāvatā /

prabhavanty abhimānaśālināṃ[1] 1. °śālinaḥ Pā.

madam uttambhayituṃ vibhūtayaḥ // 48 //

義務の完遂をなしていない，自尊心（プライド）をもつ人々の権勢は，わずかばかりの謙虚さによって，衝動を阻止したという自惚れを増大することが可能である。

---

[31] M.註：「しかも今は攻撃の時ではない，という意向から，〔この詩を〕述べている.」

madamānasamuddhataṃ nṛpaṃ

na viyuṅkte niyamena mūḍhatā /

atimūḍha udasyate nayān

nayahīnād aparajyate janaḥ // 49 //

愚かである状態は，自惚れと自尊心によって思い上がった王を決して解放することがないので，ひどく愚かな〔王〕は政策には見捨てられ，人々は政策に乏しいことから不満をもつのである[32]。

aparāgasamīraṇeritaḥ

kramaśīrṇākulamūlasantatiḥ /

sukaras taruvat sahiṣṇunā

ripur unmūlayituṃ mahān api // 50 //

〔このように〕反感という風によって揺らされ，徐々に裂かれ，腐った根の広がりをもつ木が，忍耐強い人によってたやすく根こそぎにされるように，敵がいかに強大でも，〔領地を〕根こそぎにすることはたやすいのです[33]。

aṇur apy upahanti vigrahaḥ

prabhum[1] antaḥprakṛtiprakopajaḥ /　　1. nṛpam Pā.

akhilaṃ hi hinasti bhūdharaṃ

taruśākhāntanigharṣajo ’nalaḥ // 51 //

味方の大臣の怒りから生じた紛争は，たとえ小さいものであろうと支配者を滅ぼす。なぜなら，木の枝の先端どうしが擦れることから生じた火は，山を完膚無きまでに滅ぼすからである[34]。

---

[32] [Har 1983] によれば，Kāraṇamālā が用いられている．

[33] M.註：「ここ（v. 49-50）では，「自惚れ」等のそれぞれ先行する語が後続する語に対する原因であることから Kāraṇamālā（原因の花環）であり，また taruvat という Upamā（直喩）がある．２つの Saṃsṛṣṭi（混合）である．」

[34] M.註：「ここでは，直喩と直喩の対象が同一の性質をもっていることを〔一方が他方の〕反射像（にすがた）であることによって指摘する Dṛṣṭānta（実例）という修

matimān vinayapramāthinaḥ

samupekṣeta samunnatiṃ dviṣaḥ /

sujayaḥ khalu tādṛg antare

vipadantā hy avinītasaṃpadaḥ // 52 //

思慮ある人は統制を乱す敵の台頭を無視すべきである。そのような〔敵〕は，実にその内部において，たやすく打ち破られる。なぜなら，統制のない繁栄は，災難を結末とするからである[35]。

laghuvṛttitayā bhidāṃ gataṃ

bahir antaś ca nṛpasya maṇḍalam /

abhibhūya haraty anantaraḥ

śithilaṃ kūlam ivāpagārayaḥ // 53 //

内政と外交において軽率な行いをなすことによって分裂に至った王の衰退した領地を，隣接した〔王〕は攻撃して奪い取るのである――崩れやすくなった岸を川の流れが奪い取るように。」と。

anuśāsatam ity anākulaṃ[1]

1. anāvilaṃ Pā.

nayavartmākulam arjunāgrajam /

svayam artha ivābhivāñchitas

tam abhīyāya parāśarātmajaḥ // 54 //

このように，困惑したアルジュナの兄（＝ビーマセーナ）に対して政策の道を混乱することなく教えているかれ（＝ユディシュティラ）に，パラーシャラの息子（＝ヴィヤーサ）は自ら近づいた――欲しているものに自ら近づくように[36]。

辞法が〔用いられている〕.」

[35] [Har 1983] によれば，Arthāntaranyāsa が用いられている.

[36] M.によれば，この表現は Utprekṣā である.

madhurair avaśāni lambhayann

api tiryañci śamaṃ nirīkṣitaiḥ[1] /　　1. samīkṣitaiḥ Pā.

paritaḥ paṭu bibhrad enasāṃ

dahanaṃ dhāma vilokanakṣamam // 55 //

優しい顔立ちによって，野生の動物たちに安心をもたらしつつ，罪を燃やしている激しい威光を回り一体に保有しているにもかかわらず，見つめることのできる，（続く）

sahasopagataḥ savismayaṃ

tapasāṃ sūtir asūtir āpadām[1] /　　1. enasām Pā.

dadṛśe jagatībhujā muniḥ

sa vapuṣmān iva puṇyasaṃcayaḥ // 56 //

突如としてやってきた，苦行の源泉であり，災難の源泉ではない，かの聖者を，大地の支配者は，驚きつつ見た――あたかも功徳の集まりが身体を備えたか〔と思って〕[37]。

athoccakair āsanataḥ parārdhyād

udyan sa dhūtāruṇa[1]-valkalāgraḥ /　　1. sudhautāruṇa° Pā.

rarāja kīrṇākapiśāṃśujālaḥ

śṛṅgāt sumeror iva tigmaraśmiḥ[2] // 57 //　　2. gharmaraśmiḥ Pā.

Meter : Upajāti[38]

その時，高く位置する最上の座席から，樹皮で作られた赤茶色の服のすそを揺らしながら立ち上がりつつ，かれは，黄色の光線の網を放ちつつ輝いた――黄金山（スメール）の頂きより昇る鋭い光線のように。

---

[37] M.によれば，この表現は Utprekṣā である．

[38] ac : |⏑ – ⏑ | – – ⏑ | ⏑ – ⏑ | – – |.　bd :　| – – ⏑ | – – ⏑ | ⏑ – ⏑ | – – |.

avahitahṛdayo vidhāya so ’rhām[1] 1. pūjām Pā.

ṛṣivad ṛṣipravare gurūpadiṣṭām /

tadanumatam alaṃcakāra paścāt

praśama iva śrutam āsanaṃ narendraḥ // 58 // Meter : Puṣpitāgrā[39]

聖仙(リシ)のように，その〔王〕は心を統一して，聖仙の最上者に対して師によって説かれた崇拝を実行し，それから，かれ（＝ヴィヤーサ）によって許可された座席を飾りつけた――心の平安が聖典学習を飾りつけるように。

vyaktoditasmitamayūkhavibhāsitoṣṭhas[1] 1. ˚vikāsitoṣṭhas Pā.

tiṣṭhan muner abhimukhaṃ sa vikīrṇadhāmnaḥ /

tanvantam iddham abhito gurum aṃśujālaṃ

lakṣmīm uvāha sakalasya śaśāṅkamūrteḥ[2] // 59 //

2. mṛgāṅkamūrteḥ Pā. Meter : Vasantatilaka[40]

はっきりと現れた微笑の光線によって唇を輝かせたかれは，威光を振りまく聖者に向かって坐りつつ，輝く光線の網を放ちつつある木星（／師）に面した満月の輝きを帯びた[41]。

（当研究所 主任研究員）

---

[39] ac : | ⏑ ⏑ ⏑ | ⏑ ⏑ ⏑ | – ⏑ – | ⏑ – – |. bd : | ⏑ ⏑ ⏑ | ⏑ – ⏑ | ⏑ – ⏑ | – ⏑ – | – |.

[40] abcd : | – – ⏑ | – ⏑ ⏑ | ⏑ – ⏑ | ⏑ – ⏑ | – – |.

[41] M.註：「ここでは，直喩の対象である王と直喩である月の属性である輝きとの直接の結びつきは不可能であるので，『それに似たような輝きを』という反射像(にすがた)という手段によって暗示することで，〔結びつきの〕不可能な事柄と結びついているので，語の意味として働く nidarśanā（例示）という修辞法が〔用いられている〕．それは述べられている――『事柄の結びつきが可能である場合，あるいは不可能である場合，反射像という手段が nidarśanā であり，それは２種からなると考えられている』（Ekāvalī 8. 19）と．」